



慶祥哲学

立命館慶祥 働く者たちの羅針盤



2022年5月

山口太一、関谷さら、岩倉衣梨奈、清水あかね、内山閣人、松田祐一、橋本魁、月館海斗

<はじめに>

### 哲学の定義

・「人間は何のために生きるのか」という根本的な問いに正面から向き合い、生きる指針としての「哲学」を確立することが必要になる。哲学とは理念あるいは思想などと言い換えてもよいでしょう。(哲学＝生きる指針、理念、思想)

・才覚が人並はずれたものであればあるほど、それを正しい方向に導く羅針盤が必要となります。その指針となるものが、理念や思想であり、また哲学なのです。そういった哲学が不足し、人格が未熟であれば、いくら才に恵まれていても「才あって徳なし」、せっかくの高い能力を正しい方向に活かしていくことができず、道を誤ってしまいます。(哲学＝羅針盤)

『生き方』 稲盛和夫 サンマーク出版より引用

### 働く者たちの羅針盤

立命館慶祥は、「世界に通用する 18 歳」の育成を目指す学校です。私たち教職員は、世界に通用する 18 歳を世に送り出すために、公明正大な目標を掲げ、そこに至る努力と自己研鑽を惜しまず、あらゆる場面で社会とつながりながら、「挑戦・貢献・協働」を実践していきます。そのためには、教職員一人ひとりが利他の精神を大切に、常に総力を結集して物事に取り組み、この学校の成長発展を目指す姿勢を持ち続けることが必要です。

私たちは、常に時代の先をよみながら、変化をおそれることなく、挑戦し続けることを原点とする職場で仕事をしています。「変わり続けることこそ、立命館慶祥の変わらないこと」であるといえます。挑戦し続けることは、私学立命館が生き残っていくための成長戦略であることに留まらず、多くの社会課題を抱えながら、どこか牧歌的で楽観的な北海道において、変化からイノベーションを起こす教育界の黒船として、北海道をリードしていく決意でもあります。しかし、挑戦にはリスクがつきものです。慶祥が変化を繰り返す中で、時に道を見失って前に進めなくなることもあるかもしれません。そんな時、この学校に関わるすべての教職員が立ち返る原点が、この哲学です。慶祥哲学が本校の隅々まで浸透し、ジブンゴト化されることで、手足の先まで「哲学」という名の血が通った学校であり続けることが、本校が道を誤ることなく成長発展を続けていくための重要なカギになります。以下に示した第1条～第15条は、このことを念頭において、現在とこれから、立命館慶祥で働く教職員のために作成したものです。慶祥哲学を共有し、互いに納得できる、心の通った教育を、私たちの日々の仕事にしていきましょう。

なお、この慶祥哲学は、私たちの学校にとって、いつの時代も大事にしたい普遍的な想いを記したのですが、その時々職場で、仲間とよく議論し、時勢あわせた内容に書き換えていくことを想定しています。押し付けられた哲学では、血の通った羅針盤にはなりえないからです。

## 【キーワード】

- ・公明正大な目標を掲げ、目標達成へ挑戦を続ける。
- ・利他の精神を大切に、総力を結集して仕事に取り組む。
- ・挑戦と変化を大事にし続ける。
- ・慶祥哲学は立ち返る私たちの原点である。
- ・慶祥哲学は常に職場で議論しアップデートしていく。

## 第1条 「忘れてはいけない原点がある」

札幌市中央区南 8 条西 1 丁目、旧札幌経済高校。

立命館慶祥の物語は、国公立優位の北の大地で、知名度も信用もないところからスタートしました。黒船襲来とも言われた立命館学園の北海道進出は、私たちにとって大きな挑戦でした。私たちは、立命館学園が、北海道の地に新たな価値を生み出すために仕掛けた「挑戦」の産物であり、挑戦することこそが私たちの原点です。学校の発展のために、私たち一人ひとりが創意工夫と社会実装、自己研鑽に励み、自由な発想で新たな挑戦を続ける。決して変化をおそれることなく、常に新たな価値を世に問い続ける。私たちの原点にある「挑戦」こそ、忘れてはいけないことであり、私たちが日々互いに声をかけあいながら、確かめ合っていくべきことです。

## //////////////////////////////////// 第2条 「世の中の原理原則と、学校の原点を判断基準に」

私たちは開校当初から、あらゆることを原理原則にしたがって判断してきました。原理原則というものは、筋が通っていて、世間一般の道徳に反しないものをさします。そうでなければ、物事は決してうまくいかず長続きしないと考えるからです。私たちは、原理原則を守りながら、自分の仕事が、「誰のため、何のため」であるのか自問し、世の中に貢献できることを考え続けなくてはなりません。また、私たちは、いわゆる学校の常識というものに頼ることはしません。「他校ではこうだから」という基準で安易な判断をするのではなく、私学立命館の一員として、教学理念と建学の精神、私たちの原点である「挑戦」を大事な判断基準としていくのです。

## //////////////////////////////////// 第3条 「1人1人がオーナーシップを持つ」

私学は公教育を担う企業です。それゆえに利益を上げ続けなければ成り立ちません。私たちの学校は、道内最高学費をお客様からいただいています。本校の学費は、自由市場において、競争の結果で決まる正しい価格であり、その価格で堂々と商売をすればよいのですが、価格に込められた期待を常に意識し、丁寧に振り返りを行い、現状に満足せず付加価値を高め、お値段以上を実現していくことを忘れてはなりません。全ての教員は、一人ひとりがオーナーシップを持って、私学で働く意味を理解し、お客様の声を聞きながら、この学校の財政的自立に責任を負う存在でなくてはなりません。そのため、どのような立場にあっても、オーナーとしてふさわしい人格と行動、危機意識を持つべきです。一人ひとりの高い意識に支えられながら、公明正大に事業を行い、正しい利益を求め、持続可能な経営を実行していくのが私たちの学校です。

////////////////////////////////////  
第4条「私学は家族です」

教職員、生徒、保護者、卒業生。立命館学園に関わる全ての仲間は、信頼できる家族です。したがって、生徒と教職員、保護者と教職員、執行部と教職員という縦の関係ではなく、それぞれがフラットに結合し、夢・目的を共有するパートナーであることが基本です。私たちの学校は、開校以来、自分以外の他者の喜びを、自分の喜びとして感じ、時に他者の苦しみを共に共有できる家族のような関係を大切にしてきました。「みんなで手を取り合いながら笑顔があふれる会場設営」。これがある種、慶祥のつながりの原風景といえます。この家族のような関係は、お互いに感謝しあうという気持ち、お互いを思いやるという気持ちであることはもとより、プロとして互いに高めあう関係であることも意味しています。

////////////////////////////////////  
第5条「顧客第一主義に徹する 小善は大悪に似たり」

私たちの学校は、生徒がこの学校に満足し、保護者が対価を支払ってくださることで成り立っています。ですから私学は、生徒がここに通うことで、自己肯定感が満たされたり、自己の成長を実感することができたり、豊かな進路実現がなされなければ顧客を失い店じまいに追い込まれるのです。私たちは、常に顧客のニーズをとらえ、生徒・保護者満足度を高めていく必要があります。ちなみにそのことは、生徒や保護者に迎合し、主導権を握られることとは違います。

////////////////////////////////////  
第6条「仕事を通じて心を磨く」

精進とは、一生懸命に、日々目の前のことにひたむきに打ち込む姿をさしています。私たちは、日々の仕事において、小さな精進を繰り返すことで、大きく成長することができます。成長とは、単にスキルアップのことだけをさしているのではなく、自己の人格を磨くということです。仕事は、生活するための糧や報酬を得るための手段ではなく、もっと崇高な意味を持ったものなのです。私達は仕事を通じて、自分の弱さや欲望に打ち勝ち、他者を想うことで、人格を磨くことができます。日々目の前のことに丁寧に取り組み、プロ意識を持って、「ド真剣」に仕事に取り組むことで、心技体すべてにおいて成長できることを忘れてはいけません。

////////////////////////////////////  
第7条「壮大な夢を描く フルスイングしないものはホームランが打てない」

私たちの仕事は、ふと気がつくとも目の前のことに忙殺されてしまう毎日です。しかし、創造的な仕事ができる人は、必ずと言っていいほど、その基盤として大きすぎるくらいの夢を持ち、未来の自分を信じ、想像をふくらませているものです。立命館慶祥を北海道一、日本一、アジア一、世界一の教育の場にしたい。立命館慶祥から世界を変える人材を本気で世に送り出したいと強く願うものたちが集い、1人ひとりが渦を起こし、大胆に仲間を巻き込んでこそ、この学校は世界に通用する18歳を育てることができる場になります。どんな大きな夢も、思わない限りはかきません。なぜなら、強い思いが、情熱となり自分と仲間を動かす原動力になるからです。

////////////////////////////////////  
第8条「自分で考え、自分で創る」

人はだれでも、一方的に与えられたことや、決めつけられたことを「ジブンゴト」にすることはできません。そしてだれでも、「ジブンゴト」で仕事ができなければ、そこに創意工夫や、働く幸せを伴ったやりがい生まれません。私たちは日ごろから、目の前の仕事を機械的にこなすのではなく、常に自分の仕事に「なぜ？」をぶつけ、自分で考え、自分で行動し、創意工夫できる存在であり続けなくてははいけないのです。

////////////////////////////////////  
第9条「対話による合意形成を忘れない」

民主主義の価値を重んじる立命館では、年齢やキャリアを問わず、ここで働く教職員同士が、開かれた場で対話によって議論を尽くす、いわゆる「全構成員による自治の原則」を大切にしてきました。しかし同時に私学ですから、常に変化を意識し、何事にもスピード感をもって判断することが求められます。このことを自覚し、対話と参加による自治の原則を守るために努力を続けるべきです。例えば、合意形成の過程で対話の機会が形骸化してしまわないよう、執行部、起案者、諸会議の主催者は、会議や打ち合わせの設定に工夫を凝らすなどするべきです。

////////////////////////////////////  
第10条「目標を共有し、反省のある毎日を送る」

私達の原点である挑戦者の姿勢。学校目標である世界に通用する18歳。これらに代表される数々の目標や、私たちが仕事をする目的は、常に職場のあらゆる場面で共有され、職場内で意思統一ができていなくてははいけません。意思統一されることで、現場の力が結束するからです。また、目標や目的が、掲げたままになっているのでは全くの無意味です。設定した目標や目的をもとに、常に反省と改善がある毎日を送ることが大切であることを忘れてはいけません。

////////////////////////////////////  
第11条「心あるリーダーが組織を動かす」

かつて西郷隆盛は、「徳高き者には高き位を、功績多きものには報奨を」と言ったそうです。組織を運営していく上で最も重要なことは、それぞれの組織の長の能力ではなく、どのような人格を持っているかなのです。リーダーとは、職務遂行の能力とともに、人間として尊敬され、信頼され、みんなのために自分の力を発揮しようとする人格の持ち主でなくてはなりません。例えば、仲間のアイデアや苦言を前向きに受け取る器の大きさをもったリーダー、職場で働く仲間に安心感を与えられるようなあたたかな行動をとることができるリーダー。こうした人が組織の長として場や機会を与えられる職場であり続けるべきです。

////////////////////////////////////  
第12条「真心が発揮される職場」

「真心」と云えば、誰もが思いやりやいたわり、愛情あることと思ひ浮かべます。また、「偽りのない本物の心、混じり気のない濁りなく澄んだ心のこと」ともいえます。人は誰でも、真の心、本物の心に思いやりやいたわりの心を持っています。共に働く仲間に対してはもちろん、生徒、保

護者、卒業生など、この学校に関わる全ての人たちにたいして、思いやりや、いたわりのある行動や言葉に満ちた職場であり続けましょう。

////////////////////////////////////  
第13条「同僚を育てる」

誰でもこの仕事をはじめたばかりの頃、自分の目の前には、あこがれの先輩の背中があったと思います。私たちの仕事は、目の前の生徒を育てることだけではなく、同僚を支え、育てることもあるのだということを忘れてはいけません。自分が自立して仕事ができるようになったか良いのではなく、同僚を育てるために利他の精神を発揮できる職場であり続けましょう。

////////////////////////////////////  
第14条「互いに尊敬しあう職場であり続ける」

アイヌ文化に受け継がれている言葉に、「カント オロワ ヤク サク ノ アランケプ シネプカ イサム」があります。天から役目なしにおろされたものは何もないという意味です。この場所で働く私たち1人ひとりにも、それぞれの役割や、ここに存在する意味があります。また、北海道で生まれた慶祥にも、ここ北海道で果たすべき役割があります。そして何より、ここで学ぶ生徒は、これから自分に与えられた何かの役目を自覚し、それを果たすために存在しています。ここに集う全ての人の中に、役割のない者などいません。このことをここに確認し、互いにリスペクトすることを忘れず、お互いが高めあえる間柄であることを大事にしていくべきです

////////////////////////////////////  
第15条「この場所で働くことが幸せにつながる」

ここで働く私たちは、私学で働く者としての自覚と責任から1日の多くを職場で過ごしています。このような状況にあって、見落としてしまいがちなのは、自分自身の幸せを考えることや、自分の家族、身内の存在です。この職場で働き続けることで自分自身の生き甲斐や生き方を見失ってはいけません。また、自分たちの仕事の陰で、悲しむ家族や身内があってははいけません。この場所で働くことが心から楽しい、安心できるという職場環境を皆で守ること。仲間と仲間の家族の幸せを心から願うことができる職場であり続けなくてはなりません。

現在と未来の慶祥を支える仲間たちへ

ここにある哲学は、立命館学園が京セラ株式会社の協力を得て設置した「新しい時代の学校経営研究会」に参加したメンバーが、研究会で得た学びを具現化するべく作成したものです。私たちは、2030年へ向けた将来構想や、山積する学内の諸課題への対応、未曾有の危機となったコロナウイルスへの対応などに向き合うたびに、稲盛経営哲学にある人生方程式、能力×熱意×哲学(考え方)にあるように、立命館慶祥をよりよい学校に成長していくためには、ぶれない軸となる哲学を持ち、それを職場で徹底することの大切さを痛感しました。哲学は働く者たちの羅針盤であることはもちろん時に働く活力にもなりえます。立命館慶祥が50年先、100年先でも活気ある職場であり続けるために、ここにある哲学が役に立つことができれば幸いです。